

昭和のお母さん

サボっているのは誰？



私の母も、義母も専業主婦だった。子どもたちの私服をほとんどは母がミシンを踏んで作り、毛糸玉を買い求めてセーターを編んだ。今では子ども服は専門メーカーがある。

しかし、高度成長期の母たちは、婦人雑誌付録の型紙を使って、生地を裁断し針を運んだ。女学校時代の裁縫教育は和裁だったのに、必要なことは確実に身につけていた。

家電製品が家事を助けるようになったことも、大きかった。「カカア電化」とやゆされながら、洗濯機は「洗多苦」とも表現された長時間の仕事から解放し、その時間を新しい家事に向けることを可能にした。洗濯機広告のキャッチコピーは「主婦の読書時間は どうしてつくるか」だった。

新聞・雑誌・ラジオなどから手に入れることのできた新しい知識を柔軟に吸収しながら、家事を通してより豊かな生活を創造していったのは、こうした母たちの活躍だった。

時代が異なれば、別の生き方が可能だったかもしれない。その豊かな才能は、社会的に発揮される場は与えられなかった。専業主婦は、この時代の理想的な女性像であり、それに満足するよう強いられた面があった。昭和のお母さんたちの心の内は分からないが、息子にも娘にも高い教育と働く機会を与えることに努めていた。自ら生き方に縛られずに次の世代により寛容な幅広い生き方を認めていたことが、女性たちの社会的な進出を開く一助になった。

高度成長期の日本の主役は、モーレツな企業戦士であり、それを内助の功が支えたいといわれる。しかし、生活面でさまざまな創造的革新を成し遂げた主役は主婦だった。食事や衣服について、家事の中で見いだされたニーズが、現在の巨大な市場と企業活動の基礎になっている。

誰のために、何のために働くのか、その能力を生かす「活躍の場」を選ぶのは、それぞれの人たちに任せられるべきだ。その意味では昭和のお母さんたちは時代の制約を負っていた。より望ましいのは、そうした制約が小さくなり、自らの志や能力に沿って生き方を選べることだろう。

「1億総活躍社会」の実現がこれからの日本を切り開くという。上からの目線でもっと活躍できるはずといわれると、私たちがサボっているのかと思わされる。少子高齢化の中

で働き手が足りないことへの対処という政策判断が背後にある。働きに出てこいということなのだ。しかし、働き方を含めて一人一人の生き方を、一つの型にはめ込むべきではない。選ぶのは私たちが、政府ではない。

選ぶことを妨げている障害があることは間違いない。仕事と育児の両立を志す母親たちの「日本死ぬ」という言葉の切実さがどこまで届いているだろう。仕事による社会的な参加に意義を見いだしている人たちも、共稼ぎでなければ生活が維持できない不安から働こうとする人たちもいる。だから保育施設だけが解決策ではない。自由な選択を妨げる制度的な不備を改めることに政府は全力を尽くすべきであり、それが政府の使命である。問題解決をサボっているのは政府ではないか。

(東大名誉教授 武田 晴人)